

蔓延する論文複製との戦い

By Holly Else and Richard Van Noorden, *Nature*, Feature, Vol. 591, pp.516-519, March 25, 2021.

論文複製による相次ぐ論文撤回

RSC Advances の編集者である Laura Fisher は 2021 年 1 月に 68 の論文の撤回を決定した。これらの論文は Paper mills（論文複製）と呼ばれる手法によって作成された論文であったとされ、その全てが中国の病院からの投稿によるものであった。論文複製は特定のテンプレートと複製された画像データを用いて第三者の企業が作成した論文を購入し、それを複数の雑誌に同時に投稿するものである。要は論文作成の外部委託である。

RSC Advances のみならず、大手出版社の Wiley は先日 55 本の論文を同様の理由で撤回した。また、*European Review for Medical and Pharmacological Sciences* も 2020 年 1 月から計 186 本の論文を撤回するなど問題の規模は大きい。こうした論文不正調査の第一人者である Christopher らの論文¹によれば、こうした論文複製の本数は数千から数万によるものとされている。

問題の背景

中国からこうした論文が投稿される背景には、医師や研究者の評価が論文数ベースであることと、論文出版数に応じたボーナス制度があるようだ。中国国内ではこうした査読者のバイパス（自作自演・お友達）や論文複製は以前から問題視されていて、国内でも論文数だけで評価を行わず、論文発表に対するボーナスを出さないことと政府機関から警告文が出ているようである。中国国内の病院で主任医師に昇格するには最低でも 3 本の査読付き論文の出版が必要なようで、こうしたゲーム的競争が不正の背景にありそうだ。

イタチごっこ

こうした論文複製を見分ける方法として、当記事では(1)アカデミックなドメインではないフリーアドレス、(2)原データの提供に協力できない、(3)低い英語力、を挙げている。しかし、こうした対策もフェイクデータの提示など何かしらの方法で適応されてしまうだろうとしている。また、1 つの雑誌が論文を不採択あるいは撤回しても、ゾンビ論文として他の論文誌で受理されれば意味はないとしている。

不毛な戦いの中にある研究者達

そもそもとして、査読で落とされるべき低質な複製論文が受理されて公開に至るのだろうか。それはやはり、論文の量を重視する研究者評価の官僚化とそのトレンドに乗っかり、アガリさえ収めれば甘い査読で出版する低質な論文の受け皿が増えたことも意味している。学術の進歩に貢献しないゴミ論文の海で論文レビューと査読の負担だけが増えていつている。私の Google Scholar Alert も MDPI の *Water* に汚染された通知ばかりになっている。日本でもこうした低質な国際誌に投稿する人が増えてきた。これが競争なら人生は豊かにならないだろう。恐らく、私が生きている時代は「ゴミ論文」で塗れた時代と後世に呼ばれる時代になるはずだ。この時代にアカデミアとして過当競争にさらされている人たちは本当についていない。

参考文献

1. Byrne, J. A. & Christopher, J. *FEBS Lett.* 594, 583–589 (2020).